

語り合う

生命誌の広場

中村桂子の
ちょっと一言

ラボ日記

表現スタッフ日記

さまざまな交流

生命誌のこれからを
考える

生命誌の広場

テーマ別に投稿を読む

- 中村桂子の「ちょっと一言」▶
- 研究について▶
- 季刊「生命誌」▶
- 展示・映像▶
- その他▶

あなたの考えをお聞かせください

ご意見はこちらから

最新のお返事

- 2019年10月02日
[RE:アゲハの気持ち](#)
- 2019年09月26日
[アゲハの気持ち](#)
- 2019年09月13日
[原爆について](#)
- 2019年09月05日
[BRHメールマガジン vol.363 新着情報](#)
- 2019年08月28日
[この夏一番元気だったものは？](#)

最新のご意見

- 2019年09月27日
[RE:アゲハの気持ち](#)
- 2019年09月25日
[アゲハの気持ち](#)
- 2019年09月09日
[原爆について](#)
- 2019年09月05日
[BRHメールマガジン vol.363 新着情報](#)
- 2019年08月23日
[この夏一番元気だったものは？](#)

過去の書き込み

2019年 10月
GO

みなさんからのご意見

季刊「生命誌」

自分の頭で考えられなくなるほど怖いことはない

投稿日：2014.07.30 ニックネーム：hon no mushi

…昨日の投稿について、断っておかなければならないことがあります。

…土の中の話ですけれど、タケノコは地上から見ると闇雲に出てきているように見えますが、地下ではちゃんとした法則にのっとって地下茎の節の所から出てきています。連続した中から発生するわけではないのです…それと同じようにみなせる該当箇所が、先にリーマン予想に関して申し上げた中での、遺伝子溜まりに相当すると思われるゼロ点ではないでしょうか…ディラックの方程式も虚数を含んだ波動方程式なので、その解もゼータ関数のように波の重なり合いで表され、実部と虚部は互いのしっぽをくわえ合う二匹の蛇のようにのたうち回っていて、観測できる部分として顔を出すのはそのほんの一部…広大な地下世界に幽かに光が差し込んでくるところ…が、現実の表象としての地上世界との接点になる…

そのような、ちょっと想像を交えた観点からすれば、遠野物語なども、人間の思い至らない世界が人間界とたまたま接点を持った所で、「憑依」「口寄せ」などの形で語り出される話と読めなくもないし、先の忍者の話も、文章を書いている米国人が（挿絵は日本人で分かり過ぎてしまうのですが）、キーワードを接点に日本社会を解釈して物語を展開していくのが読む側にとっては、その破天荒なあらすじを許容したくなる程、想像力を刺激してくれる…

…そういえば最近、我が家に一台しかないテレビが（話の成り行き上）勝手に大型のものに変えられてしまったのですが、なんだかキモチワルイです。自分の考える領域が侵食されて追い出されるようでコワイ…

その他

〈あるじ〉は冷たい土の中に

投稿日：2014.07.29 ニックネーム：hon no mushi

…勝手に書き進めるのは誠に忍びないのですが…

今朝、道端でナナフシが死んでいるのを見かけ、この辺りにもいたんだな…メズラシイ…と思いました。

奇妙な出会いは2週間以上前にもありまして、カシの木の間から輝くような白い斑紋が際立つ黒いアゲハが悠々と飛び出してきて、目の前をかすめて脇道に飛び去りましたが、またそこを通りかかったところ、デジャヴかと思われるぐらい同じパターンで、同様のシーンが再現されました…

もう一つ、生命の不思議さに驚かされたのは、昨年掘り起こし寒さにあてないで冬を乗り切らせたサツマイモに、芽が生えてきたことです。水も遣ってないのになんという生命力だろう、と感心しました。…ただ、よく考えてみると、サツマイモというのは、元々水の少ない地方の産物で、地下茎を自ら太らせることによって、冬では枯れてしまうような地上部の寒さにも土の中で耐え、組織を密にして毛細管現象のように保水力を獲得しているのではないかと…

土の中…15cmも掘ればそこは別環境…冬の-15度の冷気も幼虫が越冬できるぐらい緩和され、夏の炎天下でも15度ぐらいで安定してひんやりしている…

新着情報

[10月19日生命誌オープンラボ](#)
(19.10.01)

[10月4、5日 生命誌を考える映画鑑賞会](#)
(19.10.01)

[昆虫脳の標本展示が登場!](#)
(19.10.01)

[パラパラめくる生命誌3ダウンロード開始](#)
(19.10.01)

[あくあびあ芥川とスタンプラリー開催](#)
(19.10.01)

…昨日は、一つの始まり（生え際）があると、そのてっぺん（生の行き着く先の…極大値）が規定される、という数学の公理も交え、今を生活している者達の存在を、白日の下に晒された竹林に譬え、それを認識しているのが覚醒している状態…と申しましたが、そこは一度始まってしまえばDNAのシーケンスに従わざるを得ない世界…

それに対し、光の届かない水底にも似た、無意識にも当て嵌められる土の中は、遺伝子の乗り換えがいつ起きていてもおかしくない、横のつながりもたくさんある世界で…モザイク的に生存の可塑性、可能性が担保され…ただそこは意識の光が届きにくく、まるで物理学で云うディラックの海のように…

…本当に毎回失敬ですが…すみません…

お返事

投稿日：2014.07.30 名前：中村桂子館長

小さな虫たちには本当にあちこちで出会いますね。動いているのも死んでいるのも。でも都会の人たちはそんなものはないと思って見もしませんでしょう。見るようになるとよいのだがと思います。

その他

つながりをつかんで

投稿日：2014.07.27 ニックネーム：hon no mushi

先に紹介致した、想像力を掻き立てられる文体の『ニンジャ…』に「その日キョートは雲ひとつない快晴で、たいへんな暑さであった…」というくだりがあったのですが、懲りずに投稿申しているこちらも関東のど真ん中、内陸なので既に37℃を超え…今は胸をかきむしられる様な天気の変遷に遭遇しています…

…本当にいつも独り善がりなことを申ししてしましますが…どうしても伝えたいことがある時は、無視されるのがわかっていても書き切るつもりで臨んでいます…

以前申したようにそれが私の目が覚めている状態で、うだる暑さも忘れてしまうのですが、今回はそれと対比させられる、竹が生えてくる喩えを挙げた中では、土壌の状態について…

タケノコは紙コップの底を上にして積み重ねたような感じで、伸びるにしたがって下の紙コップの底辺が上のコップの口にぴったりつくように、振れながら成長していく…その様を思い起こし、例えば地面から出ている節々を見ると（上を見上げるまでもなく）下がマダケなら先端もマダケとわかる…最初の1、2番目が決まってn-1とn番目のつながり方がわかれば帰納法が成り立ち、そうすれば上下につながる一続きの竹の幹のようなシーケンスを安心してつらまえられる…それは超限帰納法という、大切な公理系の一つらしく、当たり前のように寝起きする地面のようなもの、この存在なしで実生活できるのは宇宙飛行士ぐらい…

…実は先週辺りか、変った夢をみまして…民家風の建物とその近辺の住宅街から出て自然豊かな野辺を歩いてから、洞窟のようなところに入っていくと脇に一つ券売機があって、その幾つも開いた岩窟の、人通りがある方に更に進むと、そこはぽっかり空が見えるプラットホームで、コンテナのない貨物車みたいなのに皆が乗り込み…なぜか私にはそこが高槻駅だと感ぜられ…

また上記の本には「…実存の意味を失いかけていた自分という点が、不意に無数の点と繋がりマンダラとなるような…」という印象深い箇所もありました…

その他

これからの生命誌研究館に期待

投稿日：2014.07.25 名前：杉山昭夫

かこさとしさんの新著『未来のだるまちゃんへ』を感動をもって読み終わりました。子供への揺るぎない信頼、子供をよく観察することが一切の原点であること、そして自分に誠実な生き方や絵本作りの信念など、多くの人、特に教員に読んでほしい本です。本の最後の方に中村先生のこともしも出てきました。生き物はきちんと棲み分けているのに、人間だけが傍若無人に振る舞っている、これで問題が起こらないはずがないだろうと。まったくそのとおりで、人間は生き方を変えなければよりよい未来は期待できないだろうと思います。並行して、雑誌『談』に掲載された中村先生へのインタビュー「人間は生き物であり、自然の

中にある」を読みました。どれも魅力的な言葉ですが、特に「複雑な自然は、複雑なままわかりたい」というのは、これからのキーワードになるように思います。人間だけが特別な生き物なのではなく、すべての生物が38億年の歴史を経て今があることの重みと価値を、人類が謙虚に受け止めることがとても大切になってくると思います。生命誌が始まって20年、その歴史と表現の努力により、生命誌を評価し、注目する人が増えたことと思います。生命誌研究館のこれからの活動と表現と発信に大いに期待しています。

お返事

投稿日：2014.07.28 名前：中村桂子館長

私も「未来のだるまちゃんへ」読みました。こういう人ばかりだったら社会はどんなに素晴らしいだろうと思いますね。この「ちょっと一言」でも触れています（青土社さんからの「ゲノムに書いてないこと」にも入れました）かこさんは古くからのお仲間になっていただいています。私の部屋に飾ってあるメッセージを見て下さい。



その他

ものすごく間の抜けた意見ですけど…

投稿日：2014.07.21 ニックネーム：hon no mushi

投稿数が増すにつれてどんどん身が縮こまってくるようで、今回は本当に月並みなことを申します…

昨日は兵器のことをチラッと申しましたが、ウクライナで民間機が撃墜されたことについて…

ロシア側は体裁を取り繕うために必死ですが、豪首相や米国の関係者が述べているように、ロシアの軍事組織から譲り受けた兵器が使われたものとみて間違いなく…それに関する遣り取りを見ていて、人間が兵器の方に振り廻されている印象が強いです。

…というか、軍事技術が高度になるにつれて、人や生き物の命が軽くなるというか、甘みられるというか軽んじられるというか…

昨日紹介申し上げた本でも語られていた状況なのですが、その土地に住んでいたほとんどの人達は、恐らく戦闘には全く無関与で、あるいは（関わりたくなくてもその土地に住んでいるというだけで）親ロシアの過激派によって敵か味方に選別され、敵ともなれば（よくて軟禁か）リンチかあるいは処刑されてしまう…そしてロシア側から大量に供与される武器の押し売り…ツケは後でもいいからと、タダほど高いものはないのに…でも、それでほぼ全ての住民に対する外国からの見方が決まってしまうのです。

（なんてつまらないことを申しているのだろう、という想いが右から左へかすめ飛びますが）亡くなられた方々は本当にお気の毒です。ですが、この事故によって、更に多くの人の命が巻き込まれるような事態に進展していくのは絶対に避けなければなりません…第一次世界大戦の発端になったサラエボ事件のようにしてしまっただけで、ここで失われた命よりはるかに多くの命がこれから奪われていくでしょう。完全に被害者でしかなかったオーストリアの皇太子夫妻が、世界大戦が長引き死傷者が膨れ上がるにつれ、そもそもそんな奴がいなければ私たちはこんなことに巻き込まれなかったのに…という怨恨の声と共に、最大の加害者に祭り上げられてしまうような二の舞は恐らく踏まないでしょうが…ここで事態の進行を食い止めなければ、今回の犠牲者達の魂は浮かばれない…最初で最後の犠牲者にとどめなければ…

外国人の視点で描かれたものを眺めてみて…ショックを受けたこと

投稿日：2014.07.20 ニックネーム：hon no mushi

方々で祭りもたけなわになっている時節かと思われませんが、なんとなく持て余した時間があつたので、ふと、とある2冊の本を手にとってみましたら、ガツンとショックを受けました…

一冊目は孫向文さんの、大洋図書から出ている本で、中国の上海近くに住む人の眼から見た中国の内情が描かれていて…は～ものすごい格差社会なんだな～と感じました…

2冊目は挿絵が気に入らなくてほっぼっておいたのですが、『ニンジャスレイヤー』（エンターブレイン発行）という、アメリカ在住の人達が書いた娯楽小説で、まだ読み始めたばかりですが（この本については、やはり絵がない方がいい）、米国人って日本の文化をこう捉えているんだ…とこれもかなりショッキングでした…

何にしる、銃火器などの武器が当たり前のように登場してくるので、マーシャルアーツ（軍隊柔術？）など、私にも実際のところどういうものか分からないものばかり…あまつさえ、バンザイ・ニュークなどという兵器？に至っては、今の日本の原子力の現状を見るにつれ、オテアゲ・ニュークの方がずっと近いはず…しかしその中でも、センタ試験で良い点を取ってカチグミ人生を送るよう親に叩き込まれながらも、その両親の後ろ姿をみて「これがカチグミなのか？」と疑問に思い、そうなりたくないと思いながらも親に逆らえない少年の話など、現実と重なる部分も多く、つつい読みでしまいます。…ただ、どうして外国人、特に米国人の眼からみると、忍者ってそんなにツヨク、魅力的に映るのだろう…ローマ帝国時代に、紀元前後に滅ぼされたイスラエルの残党が暗殺部隊となって、首都ローマに居る皇帝の首を狙って暗躍した、という話が実際あったと聞きましたが…しかし、初期設定としてなぜサイタマになっていて、ソウカイヤに狙われてジアゲされて、コケシマートという名の店があつて（コケシは東北地方で飢饉の時に子供を消した身代わりだったと…柳田国男さんの話では…）、その上尚更、重金属の雨が降る…？

前者として挙げた本の舞台の杭州では、ちょうどそのような雨が降ったことが臨場感を持って詳しく書かれていましたが…ショックですね…

科学と技術

投稿日：2014.07.20 ニックネーム：バイアス郎

科学技術館で開催されたセミナーでの先生の講演を聞かせていただきました。最後の質疑の時間で、科学と技術をひとつのものとし、科学技術と呼ぶことが納得しがたいという先生のお話が、印象に残りました。

この時私は、寺田寅彦博士が、線香花火の研究をされていたという話を思い出し、この研究がはたして科学技術と呼べるのかと考えました。

もはや、現代では科学とは呼べないのかもしれないtrません。

それは、経済的なものを感じる事が難しいから。

お返事

投稿日：2014.07.24 名前：中村桂子館長

ありがとうございます。科学技術という言葉だけで、日本の科学政策を語るようになってから歪みが出てきたように思います。科学は科学として大切に、科学技術は科学技術として進めるようにした方が納得がいきますし、両方共よい成果を出せるように思うのです。

また御意見お聞かせ下さい。

季刊「生命誌」

自分の思うがままに自然を操れると思ひ込んだ者達へのしっぺ返しは怖い

投稿日：2014.07.18 ニックネーム：hon no mushi

先に地震のことを書きましたが、地震波が跳ね返されたというのは、和泉と六甲の両山地に挟まれたもっと狭い範囲でのことでした…西川先生のお話からすると、大阪湾に臨む地域の多様性に、突発的に制約がかかって…今はその教訓

を生かして秩序を取り戻しつつある、というところでしょうか…（浪人して予備校で授業を受けようとしていたあの朝は、何が起こっていたのか実感がつかめませんでした…）

ところで、田中先生の大変興味深いお話を拝読し、ふと思ったことがあります…

ATP依存性タンパク質分解酵素…という所で、ATPというのは、ハンダごてのように局所的に熱いエネルギーを持ったもので、当てるとジュワッと水分が飛び去り脱水縮合が行われる…でも、ATPがADPやAMPからエネルギー的に格上げされる時は、それらを鍵穴に嵌める様な蛋白質はなくて、ただ熱的・材料的環境が整っていさえすればよく、それらは熱を化学エネルギーに変え得る媒体なのでは…そしてグリセリンでその蛋白質の活性が保たれるというのは、ハンダごてがツルツと滑ってしまっとうまく当てられない感じ…？

（最近、植栽用バリカンを使っていて、刃先に油を塗ったのに（使って一分も経たない内に）急激に回転数とパワーが落ちてしまい…分解して調べてもらったら、クランクのカムのグリースが切れていました。鉄も熱くなると引っ付くようで、それを滑らかに動かすには、グリースが絶対に必要…先の銃が出てくる話でも、ガングリスのことが書かれていました…またその際の濃縮火薬はニトロ系？…ATPなども、5員環リボースとプリン塩基に分かれてしまうとどちらも還元性が出てきて不安定に…）

前回に「濃縮」という人為あるいは機械的な生命のつながりの破断について申しましたが、今回はマンダラがゆっくりゆっくり坂を上って行って、ある時ストーンと崖から落ちる様子が思い浮かび…ゆっくり上っている時は、連続的にマンダラ内の構成要素の時間的変化が起きていて…急に落ちるときは、不可逆的に不連続に、マンダラ内の構成要素が入れ替わっている…時間軸に沿って、のこぎりの歯のようにそびえ立った山と谷を、マンダラは戻ることなく進んでゆき…



その他

鉄を使って器械化された、向い合う虫捕り網の原理

投稿日：2014.07.12 ニックネーム：hon no mushi

何度も煩わしてしましますが、昨日挙げた話の中で、現在を生きる人間にとって忌まわしくも絶対に切り離せないものが出てきます…それは銃です。

銃は抽出された燃料と精製された鉄を主原料として、通常では扱わない程のエネルギーを凝縮して撃ち出します…

鉄は、鉱物としてある時は大抵酸化されていて、生き物の体中に散らばっている分には、互いに大きく結びつかないようにうまく埋め込まれ、襲ってくる酸素分子をすんでの所までおびき寄せ、そのエネルギーはうまく利用される…

燃料の方は、今は殆ど化石燃料ですが、例えば虫捕り網の、網の先と輪っかの間にもう一つ取っ手の付いたリングがあるものを想像してください…シャボン玉をつくる時の、金魚すくいのような二つの輪の間に、シャボンの膜が筒状になって危うく形状を保っている様子でもいいです…そしてその中に一匹の蝶が舞い込んできたものとして、二人で、あるいは左手で一方の輪を固定して右手で取っ手の付いたもう一方のリングを、ボルトをナットにねじ入れるようにぐるぐるぐるぐる回すのです…当然輪と輪の間の網は捻じれて、雑巾を絞っているような形になります。中にいたものも圧迫されて、その網の目から外に抽出されて出てくるもの…が油、もしくは更に精製されて…（別に中の物は植物でもいいです…）

そこで、先の「うつしかえる」話につながるのですが、そうやって生き物をぐちゃぐちゃにして得たエネルギーは大変利便性が高く（贈り物で、モノではなく商品券を頂く様な感じ）、高濃度にまとめることも出来て、原子力につながる「濃縮」の発想の源流になっていると伺います。しかし、生き物が生きて持っているエネルギーや生体構成物質を、自分の体の中にうつしかえる（要は、色々な体内微生物や日光その他の力を借りて代謝産物として体内に摂り込む）という、一構成体から他の構成体への、対応する要素から要素へ写像としてのうつし込みが、輪≒マンダラの一部から同じ輪の別の部分にうつる際にねじ切れるような感じで「観ている側」から追えないということは…もはや生き物の存在を介さない…でもそれって代数的に云ってもつまらない…



中村桂子の「ちょっと一言」

何人の命

投稿日：2014.07.12 ニックネーム：りょう

親の親をたどっていきますと、10代前、20代まえでも凄い人数になってしまします。人口は反対にどんどん少なくなっていきますので、共通の先祖につながっていくとは思いますが、いったい何人くらいの人命が今の自分の内側に宿っていると考えられるのでしょうか。

中村桂子館長

投稿日：2014.07.16 名前：中村桂子館長

DNAで考えますと何人の命というよりもすべての命が自分の内側に宿っていると考えられることになります。38億年前の祖先細胞から地球上のすべての生き物が生きてきたわけですから。そう考えて生き物の歴史と関係を調べていくのが生命誌なのです。

その他

せっかくなのでライブのドライブ感、お祭りの高揚感を味わいたい

投稿日：2014.07.11 ニックネーム：hon no mushi

昨日、サッカーの攻撃パターンを認識する際の、チームごとの特質を分かり易くうつし込めるようなモデル生物を（勝手に）挙げましたが、3位決定戦の2チームは…皆様にお任せしたいと思います（こんなことやっているのは余程の暇人ですね、私は大好きですが…）。ちなみに日本チームはハエトリグモかな～、とも思ったりするのですが（実際の生物の強さ・弱さ、速さ、醜さ…などは関係なく、感覚的な体の動かし方です）。

…実はその投稿の後、雨が当分降り出しそうにないので、そばの竹藪のなかをうろうろ見に行ってきました。…風だけは比較的強く、時たま同調するように一斉に竹が風になびく様子は、絶大な影響を及ぼしている台風の本源的な怖さを通り越して、痛快で、笑い出したくなるほどの壮観でした…

…これが台風が通り過ぎる際のライブ感覚…竹の幹が一斉にしなり、笹の葉が頬をかすめ、風が吹き抜けていく一種独特の疾走感…

…サッカーで云うと、サポーターが一体化した時の競技場の臨場感に近いのかも…

…先に挙げた『アイアムアヒーロー』という話の、手持ちにある刊の最後で、病氣から回復した女の子の、「…沢山の人の気配がして、ザワザワして全然さみしくなかったの。えーとライブの開演前みたいな…みんなソワソワワクワクしてて、みんなつながっていて、気持ちも同じ方向を向いていて全然さみしくなくて…」というせりふがありました。似たような感じ…

…線香の煙のように、行く末がどれだけ揺れて広がり、どちらの方に漂ってくるか…私にはよくわかりませんが…

その他

やっぱりお祭りは楽しまないと…

投稿日：2014.07.10 ニックネーム：hon no mushi

…更に他愛ない投稿となり、本当にくだらないアイデアですが、サッカーW杯の決勝戦を、ちょっとおかしな風に、色々頭の中で置き換えてみました…

私が空想したのは…

クローゼ選手を軸としてボールが回ると（そのストライカーが必ずしも決めなくてもよいのですが）相手に驚異の打撃を与えうるドイツ…を、見た目ちょびり草食系の「ナナフシチーム」とします。そして相まみえるアルゼンチンを、ワニに近い肉食系「トカゲチーム」とします。

何故そのように喩えるかは…一人一人の選手の立ち位置をそれぞれの生き物の脚（跡）としてうつし換えてみれば、攻撃の様相がわかって面白いのではないかと…思ったからです。ここでは、ドイツは6人（選手を特に選んで決めつけないで、ルーズでフレキシブルに捉え）、アルゼンチンは4人（もしくはカウンターを狙う時には絞って2人）として、連携をとる網の目をかぶせると、つなぎ方に独特の解釈ができて、何より攻撃の有機的なつながりなど、楽しめそうな気がしたのです。…ドイツでしたら、きれいな三角に近い形でボールを回してスマートに決めてくると思いますし、アルゼンチンはズルズルと相手を引っ張りまわしてパワフルに押し込んでくるような…（コーナーキックからの得点と

か、そこまで深くは考えてないですけど…)

…先程、台風っ気の風の吹きまくるなか、本物のトカゲが逃げていくのを目にしましたが、クネッ、チョロッ、と、とんでもない速さでした…あっという間に時間は流れ、終わってみれば後の祭り、結構勝負って一瞬でカタがついてしまう… (なんだか急に風が強くなってきました…)



その他

信じられない事態…遺伝子溜まりと放射能

投稿日：2014.07.09 ニックネーム：hon no mushi

ろくでもない投稿を続けて申し訳ありません。

今は、熱を帯びているW杯サッカーと台風に気をとられています…

…準決勝第一試合を今朝観ました。ブラジルはエースの欠場は響いてないと思いますが、キャプテンがいなかったのは大きかったようで…相手のエースは怖い選手でしたし、チーム一丸となつての連係のとれた攻撃はすごかった…明日の第二試合は、両チーム対照的な、一方は柔の、一方は剛のドリブラーが鍵を握っていて楽しみです… (お酒の量で起きられるかどうか左右されますが、呑めば呑むほど早く目覚め…)

今回の台風は大型で強く、関東にかかっている梅雨前線に熱い空気を送り込んできていて、通り過ぎるまで大雨の恐れがあるようです。

…そこでふと気付いたのですが、途中で海 (大量の温かい水のかたまり、溜まり) があって、そこをかすめて送られてきた湿気を遮る、山や冷たい北側の空気などの壁が、雨が降る場所を規定する…大台ヶ原などは有名ですが、それは以前リーマン予想を私なりに解釈申し上げた際にゼロ点に喩えた、谷あいの遺伝子を貯めこんでいる水溜りを連想させ…低気圧や前線に向けて強い南風が吹くと、その、遺伝子を含んだ水が触媒作用を受けたように運ばれてゆき、別の溝やヒダに落ちて、たまる…

そういえば、瀬戸内海は、中国山地と、紀伊山地から連なる四国山地系 (阿蘇まで続く?) に挟まれて形成されているようで、岡山や香川などは、冬も夏も外海からもたらされる水分が少なく、風だけは強く乾いている… (弘法大師様が溜め池を造られたそうで) …阪神淡路大震災の時も、摂津辺りで発生した地震波が、その両山地系にこだまのようにね返されて、その谷あいで波が重なり合ったから局所的に被害が大きくなった…と聞きました。

日本は本当に入り組んでいて山谷が激しいので、〈遺伝子の水溜り〉に入り込んできてその働きを阻害するような放射能が運ばれてくる事態は、まず真っ先に考えておいた方がよい、というのが福島事故の教訓だったはずですが…



季刊「生命誌」

トカゲのアン

投稿日：2014.07.07 ニックネーム：hon no mushi

家族で話していて、NHK朝の連続ドラマの話になりました。私は観ないタッチで、赤毛のアンも読んだことはなくて…今回の付録模型にあやかって上のタイトルになりましたが…

…アンについて何も知らない私が、舞台となる場所はアメリカ北東部のメイン州辺りでないの、あの有名なホラー作家S.キングが住んでいる近くの…?と聞いてみたら、もうちょっと北…でも英語圏だね、話の進むところは…そういえば、アンに住んでた家の暖炉の上に絹のハンカチが置かれている場面があったけど、あれって当時の富岡製糸場から輸出されていたんじゃないの、裕福じゃなかったみたいだけど…アンの子の内の一人も、いじめられる程内気だったけど、それでみんなを見返してやりたいと強く願って、ヨーロッパの第一次世界大戦の戦場に志願兵よろしく行くんだよね…とかいう話になって、あれ、それって漱石の『心』が連載されている頃のこと、あ…つながった、と思いました。

地理的には遠く隔たった所なのだけれども、それぞれの生活に同じ匂いがする…社会生活でのうつし込みがあり、目に見えない相互の橋渡しがあつて…

…今朝、シマヘビを見たのですが…漱石の猫ならぬトカゲのアンならこう云いそうです…

…あなたはトカゲトカゲと言っているけれど、あなたが想像している私はカナヘビよ、しかもヘビじゃなく手足はちゃんとある。その近視眼的で生物オンチ

な思い込みグラスを外して、私たちのヴェールを剥ぎ取ってみなさいな、本当に一肌脱いだけで手足があったりなかったりするんだから…でも、あなたの理解レベルじゃまだまだ、修業が全然足りないわ…ちなみにトカゲの方もあなたはよく見かけているはず…黒っぽくてぎらぎら光ってグロテスクなやつよ…なんだか桐野夏生さんの小説みたいだけど、それは人間界の常識から測った見方ね…ごめんなさいね、S.キングの小説でさえ辟易しているあなたにこんなこと言って…

…ちょっと辛口でした…ウィスキーぐらいに…



その他

日本は戦後還暦過ぎて、近代発生初期の明治に逆戻りってことはないと思いますが…

投稿日：2014.07.04 ニックネーム：hon no mushi

いよいよ梅雨前線が私の住む関東にかかってきて、空は雲に覆われどんよりと雨模様です…こういう時は竹藪に入ると、かなり上の方の葉っぱにもナメクジが上がってきていて、共に単為生殖に近い増え方をするその2種のコンビが、水の滴る、何というか湿骨林かというぐらいの生命力を全身で感じさせてくれます…

季刊生命誌をWEBで観ているうちに、原腸と神経堤の形成に関する研究をまとめたポスターも相当拡大して拝読し…これはおもしろい、と思いました。これだけの成果は、でき得るなら、いつも送って下さる季刊生命誌に同封して頂けたらよかったのに…とちょっと残念に思いました（これが今回一番伝えたいことです）。

ところで、筍は出始めに頭を切っても伸びてくるのですが、断面だった平面から、芯を中心としてらせん状に伸びてくるのですね…

…どうも頭の中も天気の影響を受けるようで全く冴えないのですが…なんだか最近、言葉が意味を持たない状況になりつつあるような…憲法の文言もオフサイドなしにあっさり裏をとられてしまいますし…朝日に100年ぶり再連載中の漱石の『こころ』で、主人公の兄が属するカネが全ての市場世界、母が属するコネが全ての教師や公務員畑、父が属する一人の軍神の元に延びる修羅道（これからの日本も、言葉で「(仮想)敵」を作り上げていくことになるのかどうか)…それらのどこかでも気をつかって生きていると、だんだん生気を失っていきそうで…本来大切な、生きている本質を見失いそうです…（「私」と「先生」の立場は、そういう状況での師弟ということなのかも…）

少し余談が過ぎました…



中村桂子の「ちょっと一言」

選ぶ側の責任？

投稿日：2014.07.04 ニックネーム：のり

今回の「ちょっと一言」に紹介のあった沖縄の小学生の作文、嬉しく読みました。いくら年令を重ねても、若い世代から学ぶことがあると思います。こういう子どもたちが気持ちを曲げないで、また、苦しい思いをしないで大きくなっていけるよう、我々も少しの努力を惜しまないようにしたいと思います。

時間があって、新聞に掲載があった憲法解釈の変更を打ち出した閣議決定文を読みました。この文章は、どう読んでも意味がよくわからない屈折だらけの文章で、読み通すのが苦痛です。それでもわかったことを書きます。まず、「脅威が世界のどの地域において発生しても、我が国の安全保障に直接的な影響を及ぼす」という表現で、なるほど、世界のどの地域にも日本の軍隊を派遣して交戦できるようにしたいということか、と合点がいきました。また、冒頭の「我が国は、戦後一貫して日本国憲法のもとで平和国家として歩んできた。」という言葉からは、1945年を区切りに侵略戦争をかさねることができなくなったことに、歯ざしりしている気持ちがよく伝わってきます。また、「武力攻撃に至らない侵害」への対処とは、たぶん、元東京都知事の暴言から始まった、領土争いをめぐる一連の事態を指しているのでしょうか、端的に言って、隣国と一戦交えたいということでしょうか。口先だけの虚勢かもしれないな、とも思います。

さて、このような政府を抱え込んだのは、選挙権を持つ「日本国民」の国政選挙の際の投票行動である、といってしまうと、それで終わりです。本当にそうか、首をひねり続けているこの頃です。

お返事

投稿日：2014.07.07 名前：中村桂子館長

口先だけでごまかすことが政治だと言わんばかりで心はどこへ置いてきたのかと心配になります。一人一人の人間のことを考えることを止めてしまったらおしまいだと思うのですが。投票で選ばれても立憲民主々義の中で行動していただきたいですね。選挙民を無視するのは許されないことだと思います。考えること、それに基づいて行動することは止めないようにしようと思っています。



中村桂子の「ちょっと一言」

子どもたちの感覚

投稿日：2014.07.03 ニックネーム：竹ちゃん

健琉くんの詩『空はつながっている』も有生くんの詩『へいわってすてきだね』も感覚で受け止めたことを詩にしています。素直に読むと共感が生まれます。政治の世界から見ると、子どもの詩だと一蹴されるのでしょうか。でも、政治家も政治家の前に人間でなければなりません。人間は、地球上の他の生き物とつながっているから生きていられるのです。いや、地球の全てのものともつながっているのです。もちろん、太陽とも月とも関係しているのです。そんな響きを感じました。

ところで、NHKカルチャーラジオで「科学と人間」という講座があります。6月まで土器屋由紀子さんの『水と大気の科学』が放送されていました。そこでも、宇宙船地球号を改めて印象付けられました。そこで、中村館長さんにもその講座の講師をしていただけるとよいなあ、と感じています。

お返事

投稿日：2014.07.07 名前：中村桂子館長

大人になるということがこういう感覚を捨てなければいけないということだとすれば悲しいですね。もちろん社会的に大人になる必要はありますが、こういうところは子どもを捨てないでいよう（というより普通に行動しているとそうなるのですが）と思います。生命誌研究館はその気持で動いています。



その他

自然からの反応呼び出しなのか…レスポンス・ドリーム…？

投稿日：2014.07.02 ニックネーム：hon no mushi

僭越ですが…
恐ろしい夢をみてしまいました

自分で行ったことのないような、山がちの斜面から降りる道路がある入り江に、小さな車と一緒にたたずんでいるのですが、その砂浜から遠く海の方を見ていると、さーっと2mぐらいの速く高い波がやってきて、それは足元に達する前に消えてしまうのですが、その後ろから大きな波がやってくるような気配がし、あわてて車に乗り込んで斜面を駆け上ろうとする…けれども、途惑って、ゆっくりと走っている車の後部から波に浸かり出す…

…という、大変リアルな夢でした。
なんで、今この時期にそんな夢をみるのだろう、現実の何かに対応しているのか…

…6月末日月曜日の朝日朝刊に祇園祭の記事があったのですが…それには触れられていませんでしたけれども、『屍鬼』という本には、貞観津波やら何やらで荒廃した当時の地方の魂鎮めのために祇園祭が始まったと汲み取れる箇所があって…

…先程、竹を刈りに行ってきたのですが、人間の生活仕様にしつらえるために、ヒトは自然に手を加え（エントロピーを下げるというか）、それではじめて生活環境が成り立ちます…私の場合は、自分の身体の外向けに張り出した窓口と自然をつなぐ通路が噛み合っとうまく機能するように、まるで魔法陣でも描くような作業…というか儀式のような感じでそれを行っています。もちろん、ほぼ一個の生命体である竹藪に切り込んでいくわけですから、カウンターとして擦り傷をいっぱいもらってきます（重装備でも服が引っ掛ったりして隙ができ…顔だけは、特に目の近くとか）。

人間は、本来あるべき場所として、自然の中につし込む（埋め込むというか

嵌め込む) 場所を与えられているのですが、そんなことも忘れてしまうようでは、自然との境界になっている波打ち際の微妙な変化にも気付かず、手痛いしっぺ返しを受けてしまう…上の喩えでは、自然の上に落とし込んでいる身の丈を意識していないと、逆照射(逆写像)である自然からのトンネルの幅、通ってくるエネルギーの幅が極端に大きくなることに想いが及ばなくなる…

▲ ページの先頭へ

[サイトのご利用について](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#) | [リンクポリシー](#) | [サイトマップ](#)



JT生命誌研究館
〒569-1125 大阪府高槻市紫町1-1 TEL:072-681-9750 (代) FAX:072-681-9743

copyright © JT Biohistory Research Hall 2012.